歴史を歩く⑩

町文化財紹介コーナー

「郷土を創ったシラス台地」

▲1991年雲仙普賢岳火砕流（入戸火砕流は，この数十万倍の規模といわれている）　写真提供：砂防広報センター

郷土を創ったシラス台地

私たち鹿児島に生きる人間にとって、切っても切れない存在であるシラス。シラスは、水はけが良すぎるために、大雨時には、がけ崩れなどの被害をもたらす。また、栄養分も乏しいため稲作には不適切である。しかし、シラス台地が存在しているがゆえに、先人達は独自の文化を創り出した。

後期旧石器時代にあたる今から約2万5千年前に、鹿児島湾北部にある姶良カルデラで巨大噴火が発生した。火山灰は成層圏まで達し、太陽の光を遮断した。そのため、地球が寒冷化したとも言われている。吹き上げた火山灰は日本全国、朝鮮半島にまで降り注いだ。

このとき発生した火砕流は「入戸火砕流」と呼ばれる。数百度におよぶ高温のガスと塵で構成される火砕流は、時速100キロメートルの速さで、南九州に生息していた動植物をすべて飲み込んでいった。

この火砕流は、高さ100メートルにおよぶシラス台地を形成することとなる。草野丘などは、私たちが現在目にするよりも、本来もっと高い山であったはずだが、火砕流の堆積によって山の麓から埋まってしまい、山の頂上部分が埋まらずに残ったものである。

この巨大噴火があった頃は、いわゆる「氷河期」であった。この氷河期は、約7万年前に始まり、1万年前に終了する。つまり、シラス台地が形成された時は、氷河期にあたる。それと同時に海面が最も低かった時期でもあり、海抜は現在よりも120mも低かったらしい。

当時の海岸線は、都井岬沖から、内之浦沖にあったことが分かっている。つまり志布志湾は存在していなかったのだ。枇榔島は、「島」ではなく「山」だったということになる。シラス台地もまた、この時期、志布志湾いっぱいに広がっていたのだろう。

鹿児島に住む先人達は、このシラス台地とともに歩んできた。稲の代わりに、サツマイモ、大根、大豆、アブラナを育て、サツマイモを原料に焼酎を作り、サツマイモを餌にして黒豚を飼育する。

江戸時代の墓などを調査すると、墓の埋土の中に、シラスが混ざっていることがある。「お清め」として使っていたらしい。門松などで土台を固めるためにシラスを使うのも、そんな意味があると聞いたことがある。

「自然が人をつくる」という言葉を耳にすることがある。確かに、郷土の歴史に真正面から向き合って仕事をしていると、つくづく自然に生かされている人間の姿が見えてくることがある。それゆえ、最近、私は自分達を育んできた自然をもっと知り、感じてみたいと思うようになった。

そんな気持ちで、切り立ったシラスの崖を見ると、あらためて想像を絶する自然のエネルギーに圧倒される。

【大崎町埋蔵文化財専門員　内村憲和】

▲持留中学校跡地裏の崖